

On the base of the credibility of affirmation in Milesian

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17202

ミレトス派における「言明の真実性」の保証について

人間社会環境研究科人間社会環境学専攻

山田 哲也

On the Base of the Credibility of Affirmation in Milesian

YAMADA Tetsuya

Abstract

Plato compares the credibility of three things, belief, true belief, and knowledge, in *Meno*. He thinks belief and true belief as the inferior in respect of credibility. And he finally thinks knowledge, namely true belief which is fixed by recollection, as the most credible cognition. This means that Plato thinks the credibility of cognition derives from the cognitive process, recollection, and thing's idea. Thus, in Plato, the credibility of cognition and the base of it are recognized as a major problem. Where is the origin of the problem?

In this paper, I will say that the problem about the credibility of cognition already is in the period of Homer and Hesiod. And I'll illustrate that the credibility of the poet's affirmation is guaranteed by these three factors, ineffectuality of human, god's irresistible superiority to human, and the function of poet as a circulator who sends some message without change from god to human. And I'll compare the period of Homer and Hesiod to Milesian period, and, finally, saying that the circulator changes from poet to natural philosopher in the process of changes of the period, I illustrate that the things which guarantee the credibility of the circulator's affirmation change from those three factors to the logicality in the inquiry of first principle.

Key Words

Milesian, Hesiod, 論理性

はじめに

周知のように、プラトンは「メノン」においてある特定の諸事物に対する認識として「思惑」「正しい思惑」「知識」の三者を比較して、「思惑」と「正しい思惑」をその確実性という点で一段レベルの低いものとみなし、「正しい思惑」が「想起」によって認識者のうちに固定化された「知識」を最も確実なものとみなした。ここでいわれる「想起」とは、話者Aと話者Bの間で展開されるある諸事物に関する議論の過程で、Aから提出され

た質問によってBの魂がかつて見知っていたその諸事物のイデアを思い出すことであるが、このことは、プラトンが知識の確実性の基盤を「想起」という過程と諸事物のイデアに求めていたということを意味している。

また、プラトンからさらに時代を遡ったヘシオドスとホメロスにおいても、「神統記」や「イリアス」に見られるように、自らの言明の真実性をムーサによって保証している箇所が存在する。この両者における「言明の真実性」に関しては、本論の中で詳しく言及するが、ともかく、ヘシオド

スやホメロスの時代においてもある諸事物に対する言明および知識の真実性に対する保証という点多かれ少なから問題とされていたのである。

しかし、この両者の間に位置するソクラテス以前の人々においては、資料的な問題もあって、彼ら自身の言明、すなわち、「万有のアルケーは何々である」という言明の真実性が何によって保証されていたのかが不明確である。本論では、この点について、ミレトス派の人々を取り上げて、彼らが自らの言明の真実性の保証をどこに求めていたのかを考察する。

1. ホメロスとヘシオドスにおける言明の真実性の保証

1-1. ミレトス派以前の世界観と人間観

ヘシオドスの手による「神統記」の主題は神々の系譜である。この系譜は、確かに神々の親族関係を記したものであるが、この著作を一読して気づくのはこの著作が神々の系譜を語ると同時に自然世界万有の成り立ちをも語っているという事実である。

116行目から始まる「神統記」の本論は、「まず原初にカオスが生じた」という一節から始まる。そして、それに續いてガイア、タルタロス、エロスという三柱の神々が、親にあたる他の神を持たないカオスと同じ位のものとして生じたということが記述され、そこから先はこれら四柱の神々がそれぞれに交わって子に当たる別の神々を産み、それらの新たな神々がまた新たな神々を産むという連鎖が延々と繰り返されていく¹⁾。つまり、カオス（混沌）、ガイア（大地）、タルタロス（暗い裂け目、あの世）、エロス（愛）という名前を持つ神々からエレボス（幽冥）、ニュクス（夜）、アイテール（上層気）、ヘーメレー（昼）、ウラノス（天）、オケアノス（大洋）という名前を持つ神々が生まれるという親子関係の記述が延々と繰り返されるのである。そして、この系譜を神々の系譜としてだけでなく宇宙論的な自然世界万有の成り立ちとしても解釈した場合、ヘシオドスが示す世

界観というのは、まさしく「神々に満ちた世界」であると主張することができるであろう。

では、そのような「神々に満ちた世界」という世界観に対して、当時の人々の人間観はどのようなものだったのであろうか。

先に、「神統記」の本論は116行目から始まるということを書いたが²⁾、世界観ではなく人間観を検討する際に注目すべきなのは、それに先立つ部分、とりわけ、23行目から32行目の部分である。

彼女たちなのだ、[このわたし] ヘシオドス、かつて聖いヘリコン山の麓で羊らの世話をしていたこのわたしに麗わしい歌を教えたもうたのは。まずははじめにこのわたしに語りたもうたのだ、次の言葉を、

神楯もつゼウスの娘、オリュンポスの詩歌女神たちは。

「野山に暮らす羊飼いたちよ、卑しく哀れなものたちよ、喰いの腹しかもたぬ者らよ、私たちはたくさんの眞実に似た虚偽を話すことができます、

けれども私たちはその気になれば眞実を語ることもまたできるのです」

こう言われたのだ、大いなるゼウスの娘、言葉の女王たちは。

そしてこのわたしに育ちのよいオリーブ樹の若枝を手折り、それをみごとな杖として与えたまい、わたしの身のうちに神の声を吹きこまれたのだ、これから生ずることがらと昔起ったことがらを讃め歌わせるようだ。³⁾

ヘシオドスの「神統記」は「ヘリコン山のムーサたちの讃歌」から始まるのだが、ここにあげた23行目から32行目に記述されているのは、「神統記」の本論にあたる神々の系譜でもなければ、ムーサ達自身に対する賛美でもない。ここでなされる主張の内容は、詩の語り手であるヘシオドスとムーサ達との関係を説明するものである。ここでいわれる両者の関係は「神の声を吹きこまれたも

の」と「神の声を吹きこむもの」の関係であるが、「神統記」においてこの箇所はどのような意味を持つのだろうか。

ヘシオドスが「神の声を吹きこまれた」という自己申告をする32行目について、Caldwellは“*As a result of the Muses' inspiration, Hesiod will sing of "what will be and what was."*”と主張することで、ムーサがヘシオドスに神の声を吹き込んだということとヘシオドスが「これから生ずることがらと昔起こったことがら」を語ることができるようになったということとの因果関係を強調しているが⁴⁾、この箇所を読む上で問題とすべきなのは、Caldwellが主張するような原文中から読み取れることがらではなく、むしろ、なぜヘシオドスは「神の声を吹き込まれる」という舞台設定を用意しなければならなかったのかという原文外のことがらであろう。

周知のように、古代ギリシアにおいては、生命的の永続性という観点から、神々と人間との間に「不死なるもの」と「死すべきもの」という区別が設けられていたが、人間を生命の永続性という点で劣ったものとみなす当時の人の人間観を「知」という点での人間の有限性と結びつけることは不可能ではないであろう。当然のことだが、生命という点で有限な存在である人間は生前と死後の事柄について知ることはできない。それゆえ、生命の有限性に基づく時間的な側面から、人間の知識には限界が想定される。ヘシオドスにこのような人間の知の限界設定を読み込むことは、先にあげた引用文のなかで、ヘシオドスがムーサから言葉を吹き込まれて語るとされているものが「これから生ずることがらと昔起こったことがら」とされているという点からも妥当なものといえるであろう。このように、ヘシオドスにおいては生命の有限性という「時間的な側面」から人間の「知」に限界が設定されていたと考えることができる。

また、目をホメロスに向けると、「イリアス」の中には以下のような記述が存在している。

オリュンポスに住まい給うムーサらよ、今こそわ

たくしに語り給え——御身らは神にましまし、事あるごとにその場にあって、なにごともすべて御承知であるのに、われらはただ伝え聞くのみで、なにごとも弁えぬものなれば——ダナオイ勢を率いる将領たちはいかなる人々であったか。⁵⁾

これは、一般に「軍船カタログ」といわれる『イリアス』の第二歌に含まれている一節であるが、注目すべきなのは「事あるごとにその場にあって、なにごともすべて御承知であるのに、われらはただ伝え聞くのみで、なにごとも弁えぬものなれば」の部分である。この部分は、前半で「事あるごとにその場にあって」という仕方でムーサ達の場所的な制約の無さが語られ、後半で「われらはただ伝え聞くのみ」という仕方で、自分の存在していない場所に存在する諸事物に対する人間の「知」の不明確さが語られている。つまり、この引用箇所は『神統記』とは異なる「場所的な側面」から人間の「知」に限界が見出されている箇所といえるであろう。

このように、プラトンにおいて人間の「知」の限界が知識論的に明確に意識されるはるか以前、ホメロスとヘシオドスにおいても「不死なるもの」である神々と「死すべきもの」である人間との対比という仕方で、時間的側面および空間的側面から人間の「知」に限界が想定されていたと考えができる。このことから、ホメロスやヘシオドスの時代における人間観として、彼らは人間に神との対比において「生命の限界」と「知の限界」の二つを読み込んでいたとみなすことができるであろう。そして、このような人間観と先に示した当時の人々の世界観を考え合わせた場合、彼らの世界全体の描き方として「圧倒的な力を持つ神々に満ちた世界」に生きる「生命においても知においても有限な人間」というある種の対比関係が見て取れるのである。

1-2、ミレトス派以前の世界観における「詩人」のあり方と彼らの言明に対する真実性の保証
1-1でみたように、ヘシオドスやホメロスの

時代においては、「圧倒的な力を持つ神々に満ちた世界」と「生命においても知においても有限な人間」という対比関係が想定されていた。しかし、そのような対比関係のなかで「知において有限な人間」に属しているはずの詩人達は『神統記』のような世界に関する主張を展開するのである。当然のことながら、人間に知の限界が設定されているからといって、ホメロスやヘシオドスが自らの作品をフィクションとして語っていたわけではない。彼らは自らの詩の内容をあくまでも真実として語り、それを聞く聴衆の側もそれを真実として受け止めていたのである。聞く聴衆の側にも、語る詩人の側にも、「人間の知の限界」という人間観が共有されていたにもかかわらず、詩人の言葉がフィクションとして認識されず真実として認識される原因はどこにあるのだろうか。

聴衆は「神々に満ちた世界」について語る詩人の言葉をただ聴く存在であるから、詩人の言葉の真実性を考察する場合に問題となるのは聴衆ではなく「詩人」である。当時の人々はこの「詩人」という存在をどのように考えていたのだろうか。当時の「詩人」について最もまとまりのある証言が残されているのは恐らくプラトンの手による対話篇『イオン』であろう。この対話篇は、ソクラテスと吟遊詩人であるイオンが詩人の本質をめぐって対話を交わす作品であるが、このなかでプラトンは「詩人」という存在を以下のように分析している。

つまり、それは、技術として君のところにあるわけではないのだ。ホメロスについてうまく語る、ということはね——これが今しがたぼくが言おうとしていたことなのだ。それはむしろ、神的な力なのだ、それが君を動かしているのだ。それはちょうど、エウリピデスはマグネシアの石と名付け、他の多くの人びとはヘラクレイアの石と名づけている、あの石にある力のようなものなのだ。つまり、その石もまた、たんに鉄の指輪そのものを引くだけでなく、さらにその指輪の中へひとつの力を注ぎ込んで、それによって今度はその指輪が、

ちょうどその石がするのと同じ作用、すなわち他の指輪を引く作用を、することができるようにするのだ。(中略) これと同じように、ムウサの女神もまた、まずみずからが、神氣を吹きこまれた人びとを作る。すると、その神氣を吹きこまれた人びとを介して、その人びととは別の、靈感を吹きこまれた人びとのくさりが、つながりあってくることになるのだ。すなわち、叙事詩の作者たちで、すぐれているほどの人たちはすべて、技術によってではなく、神氣を吹きこまれ、神がかりにかかることによって、その美しい詩の一切を語っているのであり、その事情は、叙事詩人たちにしても、そのすぐれた人たちにあっては同じことなのだ。(中略) その彼らの言葉は、真実でもあるわけだ。⁹⁾

この引用文でいわれているように、プラトンは、「詩人」がある事柄について巧みに語るという事実を、磁石とその磁石によって磁力を込められた鉄の関係になぞらえて、女神（磁石）によって神氣（磁力）を吹きこまれた詩人が女神に由来するその神氣を、詩を語ることによって、新たな鉄である聴衆にさらに吹き込むという一連の流れとして考えた。つまり、プラトンは「詩人」という存在を女神と聴衆の間に立つ仲介者として認識していたのである。しかも、プラトンが主張する「仲介者」としての「詩人」のあり方は、以下の引用文でいわれているようにかなり徹底したものである。

彼（詩人）は、神氣を吹きこまれ、吾を忘れた状態になり、もはや彼の中に知性の存在しなくなつたときにはじめて、詩をつくることができるのであって、それ以前は、不可能なのだ。けだし、いかなる人も、彼が、この知性という財宝を保っている限りは、詩をつくることも、託宣をつたえることも不可能なのである。¹⁰⁾

このように、プラトンにとって「仲介者」としての「詩人」とは、自分自身の内側が空っぽな状態

になったときにはじめて、神の神氣を聴衆に伝達できるのである。つまり、「詩人」のあり方とは、磁石の比喩における石が示すようなあり方というよりも、女神と聴衆をつなぐトンネルのようなあり方なのである。そして、プラトンはそのようなあり方をしている「詩人」の言葉に対して「彼らの言葉は、真実でもあるわけだ」と主張しているのである。

さて、このようにみてくると、プラトンが主張する「詩人」のあり方において、彼らの言葉に真実性が保証される原因は、「詩人」というトンネルの向こう側に存在している「女神」、および、女神の言葉をトンネル的にそのまま伝えるという詩人の機能にあるといえるであろう。つまり、「詩人」の言葉を聞く聴衆は彼の言葉が神の言葉であるがゆえにそれを真実として受け取るのであり、「詩人」の言明の真実性は「何もしない」という「詩人」のあり方と、その「詩人」の向こう側にいる「神」(ヘシオドスの場合は彼に言葉を吹き込んだ「ムーサ」ということになるだろう)によって保証されているのである。

しかし、仮に、詩人の言葉の真実性が神にあるとするならば、当時の人々が信仰する神々とは真実の保証となりうるような存在だったのだろうか。実際、先にあげた『神統記』からの引用文中で「私たちはたくさんの真実に似た虚偽を話すことができます、けれども私たちはその気になれば真実を語ることもまたできるのです」といわれているように、当時の神々は常に真実を語るような存在ではなく、人間を欺く可能性のある存在なのである。そして、このように考えてみると、詩人の言葉の真実性を単純に神に求めるのは真実性の保証として不完全であろう。

ここで考慮すべきなのは、当時の人々が意識していた神々と人間との間の圧倒的な能力差である。先にも言及したように、当時の人々は「生命の永続性」と「場所的な無限性」の点で両者の間に厳格な差異が設けられていたが、『イリアス』に描かれる神々のありようをみてみると、両者の間の差異はそれだけではないことが分かる。「イリア

ス」はトロイア戦争の状況を人間と神々の両者を関連させながら描いた作品であるが、第一歌で描かれているアポロンの痩病が象徴的であるように、人間達の争いの中にひとたび神々が現れると、人間は神々の圧倒的な力の前に、ただオロオロとうろたえるだけであり、最終的には自分達に災いを起こしている神々とは別の神々に助けを求め、みずから力ではなく神の力でもって、自分達に災いをもたらしている神の力に抵抗しようとするのである。つまり、「イリアス」に描かれている神々に対峙する人間のあり方は限りなく無力に近いありかたなのである。この人間の無力さは、第十六歌に歌われている「だが常にゼウスの意図は人間のそれよりも強く、勇猛の士を敗退せしめ、やすやすとその勝利を取り上げるかと思えば、またある時は自ら進んで戦いに奮い立たす」という一節に象徴的に表されているが、この一節からも当時の人々は「生命の永続性」と「場所的な無限性」という二つの点以外に、「能力」という点でも人間と神々との間に圧倒的な差異を見出していたと考えることができる。

そして、この神々に対する人間の無力さを考慮に入れると、人間を欺く可能性のある神々を詩人の言葉に対する真実性の保証とみなすことに一定の正当性が見出せる。つまり、人間は、例え神が人間を欺く可能性のある存在であったとしても、神が「真実」として語った言明に対して、それを疑う手段を持てないのである。『イリアス』に描かれているように、人間は神々の前で無力な存在であった。それゆえ、人間は神々の言明に対して、それに疑いを持ったとしても、それを検証する手段を持たないのである。より率直に言うと、神が「真実である」と語った言明を、人間は「信じる」ことしかできないのである。そして、このように考えてみると、当時の人々が、欺く可能性のある神を言明の真実性の保証と考えていたということにも一定の妥当性が見出せるであろう。

さて、以上のことを考え合わせると、ホメロスやヘシオドスの時代において、彼ら詩人の言葉が真実性を持つものとみなされていた理由は、通常

の人間とみなされる「聴衆」にかかる要素として用意されている「人間の無力さ」、人間と神をつなぐ存在である「詩人」にかかる要素として用意されている「神の言葉をそのまま伝達する」というあり方、そして最後に、詩人に言葉を吹き込む存在である「神」にかかる要素として用意されている「人間にに対する神の圧倒的な優越性」の三つであると考えることができよう。

このように、ホメロスやヘシオドスの時代においては、「神々に満ちた世界」と「有限な人間」という世界観と人間観のなかで、「神」「詩人」「人間」の三者それぞれに「詩人」が語る言明の真実性の保証となりうる要素が振り分けられていたと考えることができよう。

2. ミレトス派における言明の真実性の保証

1でみたように、プラトンまで時代をくだらなくとも、ホメロスやヘシオドスの段階ですでに、詩人の言明に対する真実性が意識され、その保証として「人間」「詩人」「神」の三者それぞれに「人間の無力さ」「神の言葉をそのまま伝達する」「神の圧倒的な能力」という特徴づけがなされていた。本論の冒頭でも見たように、ホメロスやヘシオドスから200~300年ほど時代の下ったプラトンにおいては、この言明および知識の真実性がより大きな問題として明確に意識され、それに対するより洗練された保証付けがなされていた。この2では、両者の間に位置するソクラテス以前の自然探究、なかでも、ヘシオドスからそれほど時間の経っていないミレトス派のアルケー探究に焦点を当て、ヘシオドス・ホメロスとミレトス派を比較検討する仕方で、彼らが自分自身の主張である「万有のアルケーは何々である」という言明の真実性をどのように保証していたのかを検討する。

2-1. ミレトス派とそれ以前の人々との世界観の共有

ミレトス派における言明の真実性の保証を考察

するにあたっては、1で行ったやり方を踏襲して、まずはミレトス派の人々が想定していた世界観を特定しておこう。

資料1、アリストテレス『魂について』A2, 405a3-5
そして、それぞれの始源についての見解に一致する形で、彼らは魂についても説明するのである。実際、そのようなひとびとは、自然本性的に動きを引き起こしうるもののが第一のもの[第一の始源]のうちに属すると考えたが、これはいわれなきことではない。⁸⁾

資料2、アリストテレス『魂について』A2, 405b12-3
そしてこれらの（魂の）特質はそれぞれ、諸々の始源へと遡って説明される。

資料3、DK11A22（アリストテレス『魂について』A5, 411a7）⁹⁾

またある人たちは、魂が宇宙全体に混在しているといっている。それを踏まえて、おそらくタレスもまた万物は神々に満ちていると考えたのだろう。

資料4、DK11A22（アリストテレス『魂について』A2, 405a19）

彼らが報告しているところからすると、タレスは「石（磁石）は鉄を動かすがゆえに魂を持っている」と言ったというからには、彼もまた魂を何か動かす力を持ったものと考えたようである。

資料5、DK11A23（アエティオス『学説誌』I 7, 11）

タレスによれば、神とは宇宙の知性であり、また万有は生きているとともに神靈に満ちている。そして、湿の本性をもつ要素体を通じて、宇宙を動かす神的な力が行き渡っている、という。

今日、「魂」というと、「意識」や「心」もしくは「脳」を意味する概念として捉えられがちである。しかし、資料4をみてみると、そこには、タレスが「石（磁石）は鉄を動かすがゆえに魂を持

っている」と考えたという記述が残されている。このことは、当時の人々の自然観の一側面を如実に表している。仮に、「魂」を先に示したように現代的な仕方で捉えるならば、「魂」に関する議論の中心となるのは「対象をどのように捉えるのか」「人間は対象をどこまで知ることができるのか」といった認識論的問題や「クオリア」という内的体験にまつわる問題が主なものとなる。しかし、古代ギリシアにおいて「魂 (psyche¹)」というものが問題となった場合、そこでは認識論的な問題だけでなく、あるものが「生命」として成立している場合に關係する生物概念（「栄養摂取」や「生殖」など）にまつわる問題や、宇宙論や天体論とも關係する「動き」の概念にまつわる問題も大きな主題として扱われる。つまり、古代ギリシアにおいて、「魂」とは「生命」や「運動」という要素と密接に関係した概念だったのである。このことを踏まえて、再度資料4に目を向けてみると、この資料で言われている主張は、「魂はものを動かすものである」という当時の人々が抱いていた魂の概念を、タレスが「磁石」を用いて確認したということを示しているものとみなすことができるだろう。そして、この段階で、タレスにおいては「魂」が「ものを動かすもの」として規定されていたとみなすことができる。

つづいて、このことを踏まえた上で、今度は資料2をみてみよう。この資料で、「魂」の特質はアルケーに起因させる仕方で説明されると言われているが、この資料2は先に検討した資料4と同じアリストテレスの『魂について』から引かれているものであり、なおかつ、その資料4に続く部分に記されているものであることから、資料2で言われている「魂の特質」には、当然のことながら、資料4で言われている「ものを動かす」という要素が含まれている。それゆえ、この資料2は、「ものを動かす」という「魂の特質」はアルkeeに起因させる仕方で説明されるものであるということが言われている資料であるとみなすことができるであろう。

続いて、資料1をみてみると、そこでは、「も

のを動かす」という特質がどのような意味でアルケーに起因しているのかということが具体的に説明されている。資料1では「自然本性的に動きを引き起こしうるもののが第一のもの【第一の始源】のうちに属する」ということが言られているが、ここで言われている「自然本性的に動きを引き起こしうるもの」とは「魂」のことである。そして、資料1では、この「自然本性的に動きを引き起こしうるもの」が「アルkeeに内在する」といわれていることから、資料1は「魂がアルkeeに内在している」ということが言われている資料であるとみなすことができるだろう。つまり、「ものを動かす」という「魂の特質」その「魂」がアルkeeに内在しているものであるという意味で、アルkeeに起因するものとして説明されるのである。

最後に資料3と資料5をみてみよう。まず、資料3では、タレスが「魂が宇宙全体に混在している」ということを根拠に「万物は神々に満ちている」と主張したということが言われている。そしてそれと同時に、資料5ではタレスが「湿の本性をもつ要素を通じて、宇宙を動かす神的な力が行き渡っている」と主張したということが言われているのである。資料5で言われている「湿の本性をもつもの」というのは、タレスに限っては「水」とみなしてかまわないであろうが、これら二つの資料を総合すると、「水」というアルkeeを通じてそれに内在している「魂」が宇宙全体に行き渡り、その「魂」が宇宙全体を動かしているということを根拠にして、タレスは「万物は神々に満ちている」と主張したということになる。つまり、これら二つの資料で言われている「神々」や「神的なもの」は、それが万有に内在しているものであるとされているという意味で、「魂」を内在している「アルkee」と同一のものであるとみなすことができるであろう。

そして、以上のことから、タレスにおいては「魂を内在するアルkee=神々（神的なもの）」という図式が成立していたと考えることができるのである。ここでタレスが作っている「魂を内在するアルkee=神々（神的なもの）」という図式はあ

る種のアニミズム的な主張と考えることができるが、タレスをはじめとしたソクラテス以前の人々においては、「生命」や「運動」の原理とみなされる「魂」が自然万有の源であるアルケーに内在するものであるとされ、その意味で、自然万有に「魂」が行き渡っているという考え方方が成立しているのである。このように「自然万有に生命原理でありかつ運動の原理である魂が行き渡っている」という考え方方は「生ける自然」という言葉で表現される。そして、タレスをはじめとした当時の人々は、この万有を動かしている「魂 (psyche ^) を内在しているアルケー」を「神的なもの (theion)」もしくは「神々」とみなしていたのである。

このように、ミレトス派においても「生ける自然」という仕方で神々に満ちている世界観が構築されており、その意味で、ミレトス派とそれ以前のホメロスやヘシオドスとはその世界観を共有していると考えることができるであろう。

2-2. ミレトス派における人間観の変質と、詩人的役割を果たす存在としての自然学者

続いて、ミレトス派の人間観について検討してみよう。着目すべきは、ミレトス派においては「生ける自然」の源であるアルkeeが探究対象とされ、なおかつ、そのアルkeeと「神的なもの」が同一視されていたという点である。このことはミレトス派において「神的なもの」が把握可能なものとみなされていたということを意味する。

また、ここで、ホメロスとヘシオドスの時代の人間観を振り返ってみると、彼らにとって人間は「有限な存在」であり、たとえ欺く可能性のある神々であっても、神々と人間との圧倒的な能力差のゆえに、人間は神々が真実として語る言明は信じるしかない無力な存在であった。しかし、このホメロス・ヘシオドス時代の人間観とミレトス派の人間観を照らし合わせてみると、ミレトス派においては、人間が「神的なもの」であるアルkeeを知ることができるとされている点で、人間はもはや「知る」という点で無力な存在ではなかった。

そして、この段階で、ミレトス派においては神々と人間との距離がホメロスやヘシオドスの時代よりも大きく縮まっていると考えができるであろう。つまり、「知ることができない」だから「信じる」というあり方であった神々と人間の関係が、「知ることができる」そして「知る」という関係に変わったということである。

さて、このようにみると、ミレトス派以前の時代において言明の真実性の保証とされていた三つの要素、すなわち、人間における「無力さ」、詩人における「神々の言葉をそのまま伝達する」という機能、神々における「圧倒的な優越性」のうち、人間と神々にかかる要素が真実性の保証として崩れることになる。つまり、人間はもはや「神的なもの」を知ることができない存在ではなく、また、神々も確かに人間と比べて圧倒的な能力をもってこそいるものの、その能力差は人間にとて決して手の届かないものではなく、人間にとても十分に到達可能な程度の差になったのである。

また、このように考えると、ヘシオドスやホメロスにおいて詩人の言明の真実性を保証する要素とされていた詩人自身の機能、すなわち、「神々の言葉をそのまま伝達する」という機能も言明の真実性の保証として機能しなくなる。この機能は人間が神々の言葉を信じるしかない無力な存在であるという点と、人間に対する神々の優越性は人間の手が届かないほどであるという点の二つに依存してはじめて詩人達の言明の真実性を保証するものとして機能する。それゆえ、神々と人間の関係性が崩れた段階で、「神々の言葉をそのまま伝達する」という詩人の機能は真実性の保証という立場を失うのである。

この点に関して、仮に、人間が神々の言葉を信じるしかない無力な存在であるという点と、人間に対する神々の優越性の二点が確保されていたとしても、人間達に神々によって欺かれた経験がないならば、「神々の言葉をそのまま伝達する」という機能は詩人たちの言明の真実性を保証するものとして機能するのではないかという異論が考え

られる。

しかし、当時の人々は自らが信じる神を、自分達人間を欺くものとして認識していた。この点に関しては、「神統記」のなかでムーサ達が自分たち自身について「私たちはたくさんの真実に似た虚偽を話すことができます、けれども私たちはその気になれば真実を語ることもまたできるのです」と語っていることからも推測できるが、より具体的に神が人間を欺いている事例はホメロスの著作の中に見出すことができる。「イリアス」の第一歌と第二歌をみてみると、そこにはアガメムノンとアキレスのいざこざに端を発して、最終的に神であるゼウスが人間であるアガメムノンを欺くに至る過程が描かれているが、その大まかな流れはおよそ以下のようなものである。

「イリアス」の第一歌において、アポロンの神官であるクリュセスは、アテナイ側に捕らわれた娘のクリュセイスを返すよう、アテナイ側の総大将であるアガメムノンに要求する。アガメムノンはこの訴えを退けるが、その拒否を受けてクリュセスは自らが使えるアポロンに訴え、アテナイ側に災厄を与えるよう要求する。アポロンはクリュセスの訴えを聞き入れてアテナイ側に疫病を発生させるが、アキレスが介入してクリュセイスを無償でクリュセスに返還して、事態は収束する。しかし、自らに断りもなくクリュセイスを返還してしまったアキレスに対して、アガメムノンは激怒し、アキレスのもとから愛妾であるブリュセイスを奪ってしまう。これに落胆したアキレスは、アキレスは母親である女神のテティスに訴えて、ゼウスを通じてアガメムノンに一泡吹かせることを要求する。アキレスの訴えを聞き入れたテティスは、ゼウスに進言し、その訴えを聞き入れたゼウスはアガメムノンに「惑わしの夢」を送ることでアガメムノンを欺き、アテナイ側にトロイア側に対する総攻撃を仕掛けさせる。しかし、ここでゼウスはトロイア側に加勢し、アテナイ側を劣勢に追い込んでしまう。

このように、ホメロスの著作においては人間を欺く神のあり様が描かれているのだが、当時のギ

リシア人達の間でホメロスが一般教養的に受け入れられていたということを考えると、当時の人々は、そこに描かれている人間を欺く神のあり様を神のあり方として受け入れていたと考えができるだろう。つまり、当時の人々にとって、神とは自分達を欺く存在だったのである。

確かに、このことは、人間達が神々に欺かれた経験を有しているということとは異なる。それゆえ、もともとの異論に対する直接的な反論とはなっていないかもしれないが、自分達を欺く神のあり方が共通認識として当時の人々の間で共有されていたとするのであれば、人間が神々の言葉を信じるしかない無力な存在であるという点と、人間に対する神々の優越性の二点が確保された場合、「神々の言葉をそのまま伝達する」という詩人の機能は、その言葉が自分達を欺く神の言葉をそのまま伝えているものであるという意味で、ミレトス派の時代においては言明の真実性の保証として機能しなくなると主張しえるだろう。

さて、以上のことから、ミレトス派の人々のように「生ける自然」の源であるアルケーを探究対象とし、なおかつ、そのアルkeeと「神的なもの」を同一視すると、ミレトス派以前の人々が主張するような言明の真実性の保証は、「保証」として機能しなくなるのである。

ミレトス派の人々とそれ以前の人々が「神々に満ちた世界」という世界観を共有しており、尚且つ、ミレトス派においてはアルkeeと「神的なもの」が同一視されていたということを考えると、ミレトス派以前において神々について語っていた人々、すなわち、「詩人」の役割をミレトス派の時代において果たしているのは、同じように自然万有について語っている人、すなわち、アルkeeを探究する「自然学者」であると考えることができよう。しかし、神々と人間の間で何事かの言明を行うというポジションにある人々がなす言明の真実性の保証は、先に見たように、ミレトス派の段階でそれ以前のものが全く機能しないという状態に陥っていた。それゆえ、ミレトス派における自然学者の言明の真実性にはそれ以前のものとは

全く別の保証が用意されていなければならないのである。

2-3. 自然学者における言明の真実性の保証

2-1と2-2でみたように、ミレトス派においては人間観の変質にともなって、それ以前とは異なる新たな言明の真実性の保証が必要とされていた。タレスやアナクシマンドロスにおいて「神的なもの」とアルケーが同一視されており、なおかつ、彼らにとって「世界」にあたる自然万有はミレトス派以前の人々と同様に「神々に満ちた世界」であったとすると、彼らがアルkeeを語る際の言明はヘシオドスが『神統記』において神々を語る際の言明と同様の対象について語っているものであり、その信憑性という点でも同じレベルのものとみなすことができるであろう。もちろん、ミレトス派においては言明の真実性それ自体が問題とされていなかったと考えることもできるが、本論の冒頭でも書いたように、プラトンにおいても言明の真実性という問題が考慮されていたとすると、ヘシオドスとプラトンの間のソクラテス以前においてのみ、この言明の真実性という問題が欠落していたと考えるのは適切ではない。では、ミレトス派の人々は、アルkeeを語る際に用いられる言明の真実性の源泉をどこに求めていたのだろうか。この問題について検討する際に着目すべきは、彼らが用いたアルkee探究の方法である。

資料6. DK11A12 (アリストテレス『形而上学』A 3. 983b 6) 抜粋

このような哲学の創始者たるタレスは、水がそれであると言っている（大地が水の上に浮かんでいると主張したのも、そのためである）。彼がこうした見解を取ったのは、おそらく、あらゆるもののが湿り気を持っていること、熱そのものさえ湿り気を持ったものから生じ、それによって生きることを観察した結果であろう（ものがそれから生ずる当のもの、それが万物の元のものに他ならない）。彼の見解は、こうした事柄によるとともに、またあらゆるもののが湿っ

た本性をもっていることによるものであろう。水こそが、湿り気を持ったものにとって、その本性の元のものに他ならないのである。

資料7. DK11A13 (シンプリキオス『アリストテレス『自然学』注解』23, 21)

例えばミレトスの人でエクサミュエスを父とするタレスや、無神論者としても知られているヒッポンは、感覚的な諸事象から導いた結論として、水が元のものであると語った。熱いものも湿ったものによって生き、屍体となったものは乾き干からび、またあらゆるもののが湿っており、すべての栄養物は水気を含んでいる、といった事態があるからである。それぞのものがそれからできているところの当のものによって、事物はまた養われもするのが本来である。しかるに、水は湿りという本性の元のものであり、すべてのものにとって必須のものである。したがって、彼らは、水が万物の元のものであると考え、そこから、大地が水の上に浮かんでいるとも主張したのである。

これら二つの資料はタレスが水をアルkeeとみなす過程を示したものである。これらの資料をみてみると、タレスは「種子」「屍体」「栄養物」といった世界の中の様々な諸事物を観察した上で、その観察の結果として、「水」をアルkeeとみなしたということが見て取れる。しかし、この資料をみると注目すべきは、タレスが自然界の様々な事物の観察から「アルkeeは水である」と主張するに至ったその過程である。あらかじめ結論を述べると、タレスがアルkeeとして水を導出する際に用いた方法は「帰納法」である。ソクラテス以前は資料的な制約があるので、どうしても推測に頼らざるを得ないところはあるのだが、これらの資料から読みとれる情報から推測するに、おそらくタレスは「屍体」などの「生」とは逆方向にある事物を観察し、「生」とは逆の事物 A=乾燥している」「生」とは逆の事物 B=乾燥している」「生」とは逆の事物 C=乾燥している」…といった具合に観察結果を列挙し、この個別的な事例の集積か

ら「生とは逆の事物=乾燥している」という一般的定義を引き出したのだろう。そしてそれと同時に、これと同様の仕方で「種子」や「栄養物」という「生の方向をもつもの」をいくつも列挙して、それらの個別的な事例の集積から「生の方向をもつもの=湿っている」という一般的定義を引き出したのだと思われる。つまり、「生」と「死」の両方に属する個別的な事例を個々に検討し、そこから導き出された個々の結論を帰納的にまとめ上げて、「アルケーは水である」という主張を自然万有に適応させる普遍的な定義として提示しているのである。

つづいて、アナクシマンドロスの自然探究とアルケー把握の方法をみてみよう。

資料10, DK12A9（シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』24,13）抜粋

元のもの（始源）は单一であり運動する無限なるものであると語っている人たちの一人であるアナクシマンドロスは、プラクスアデスを父とするミレトスの人で、タレスの弟子にして後継者であった。彼は「存在するものの元のもの（始源・アルケー）」すなわち基本要素（ストイケイオン）は「無限定なるもの（ト・アペイロン）である」と語った。

資料11, DK11A9（シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』150,24）

対立相反的なものとは、熱いものと冷たいもの、乾いたものと湿ったものなどのことである。

資料12, DK11A9（アリストテレス『自然学』A 4,187a20）

ある人々は、一なるものからそれに内在している対立相反的なものが分離する、としている。例えばアナクシマンドロスや、またエンペドクリスやアナクサゴラスのように一なるものと多なるものの存在を述べた人たちが、そのように言っている。彼ら二人もまた、混合体から他の諸事物を分離させているからである。

これらの資料はアナクシマンドロスのアルケー探究を示したものである。まず、資料10をみてみると、そこではアナクシマンドロスが「無限定なるもの」をアルケーとみなしたということが示されている。そして、その「無限定なるもの」から諸事物が生じてくる過程が、資料12において「一なるものからそれに内在している対立相反的なものが分離する」という仕方で説明されており、資料11では、資料12において言われている「対立相反的なもの」に対して「対立相反的なものとは、熱いものと冷たいもの、乾いたものと湿ったものなどのことである」という仕方で補足的な説明がなされている。つまり、アナクシマンドロスは「熱いものと冷たいもの」や「乾いたものと湿ったもの」といった相互に矛盾するものが、タレスの主張するような「水」という限定的な単一の事物から生じることを退け、矛盾する相互の事物を両方とも包括する非限定的なものをアルケーとしたということである。このことは、アナクシマンドロスがある一つの「限定的な事物」を A へ → A という矛盾律によって定義することを拒否したということを意味する。そして、この「拒否」に基づいて、アナクシマンドロスは「無限定なるもの」といういかなる定義も許容する限定できないものをアルケーとみなしたのである。

さて、以上がミレトス派における自然探究とアルケー把握の方法である。アナクシメネスがアルkeeとして主張する「空気」はアナクシマンドロスの「無限定なるもの」に記号的な名前を付したものであり、また、アナクシメネスの功績は本論の主題とは異なる部分にあるのでここでは割愛するが¹⁰⁾、ここまで議論を考慮すると、ミレトス派の人々がおこなうアルケー探究は素朴なものではあるけれども確実な論理性をもち、とりわけ、タレスの場合において顕著なように、感覚的な個々の諸事物からそれらを包括する普遍的定義へと超えていくこうとする意図がみられる。

ここで『神統記』においてなされる「神々に満ちた世界」の言明を振り返ってみると、その言明の中にミレトス派のアルケー探究に見られるよう

な論理性はみられない。詩人であるヘシオドスはムーサに起因する言葉を受けて、何の前触れもなく、「まず原初にカオスが生じた」と語るのである。この「語り」に「なぜ」という理由付けは存在しない。ヘシオドスは「人間の無力さ」と「神々の人間にに対する優越性」を後ろ盾にしながら、ただ淡々と「神々の言葉をそのまま伝達する」という詩人の役割を果たすのであって、この人間・神々・詩人という三者それぞれに振り分けられた要素が正しく機能している限り、詩人が述べる言明は単に真実だったのである。

しかし、ミレトス派の時代においてはこのような考え方とは通用しない。彼らにとって人間は「神的なもの」も把握できるだけの能力を持った存在であり、「生きる自然」と人間の間で自然万有の始源、すなわち、「神的なもの」を語る自然学者には「なぜ始源をそのように語るのか」という根拠付けが必要となるのである。では、自然学者は何によってその根拠付けを行うのであろうか。この問題に関しては、本節で検討してきたように、「アルケー探求の際に用いられる探究手段の論理性」をその答えとして提示することができるであろう。つまり、この「アルkee探求における論理性」こそが、彼らの言明の真実性を保証するものなのである。

3. ミレトス派が有する論理性の哲学史的意義 ～結論にかえて～

1では、ヘシオドス・ホメロスの時代において「世界」「伝達者」「人間」の三者をめぐる関係として「神々に満ちた世界」「神々の言葉を伝達する詩人」「無力な人間」という概念が形成されており、これらの概念のうち、「神々に満ちた世界」という概念だけはミレトス派に至っても「生ける自然」という仕方で共有されていたが、それ以外の二つの要素に関しては「自然学者」「高い能力を持つ人間」という仕方で変化し、それに伴って、「世界」「伝達者（詩人、自然学者）」「人間」という三者が形成している関係も変化したということ

が確認された。そして、その議論を受けて、2では「世界」と「人間」の中間に位置する存在が「詩人」から「自然学者」に変化し、その言明の真実性の保証が「神々の言葉をそのまま伝える」という機能から「アルケー探求における論理性」に変化していたということが言われた。この真実性の保証の変質は哲学史的な観点からどのような意義を持っているのであろうか。

タレスを「哲学の始祖」とみなしたのはアリストテレスである。しかし、実際にその言明がなされている「形而上学」の該当箇所をみてみると¹¹⁾、その主張の根拠は安易に受け入れられるものではない。アリストテレスは「自然学」や「形而上学」で述べているように、ある一つの事柄を十全に知るということはその事柄の第一次的な原因を知ることであるとした上で、その第一次的な原因を知ろうとする探究を「知恵の愛求（哲学）」とみなした。そして、アリストテレスは、自分が諸事物の第一次的な原因とみなす四つの原因、すなわち、形相因、質料因、始動因、目的因のうち、質料因にかかる探究を最初に行ったという理由でタレスを「哲学の始祖」とみなすのである。つまり、アリストテレスは自分自身が哲学的営みとみなす行為を行っていたという理由でタレスを「哲学の始祖」としたのである。より簡潔にいようと、アリストテレスがタレスを「哲学の始祖」としたのはあくまでも自分自身の規準にのっとった上でのことなのである。

しかし、アリストテレスの見解を離れて、ホメロスやヘシオドスといったミレトス派以前の思想と比較する仕方でタレス達の学説を検討すると、彼らの学説にはそれ以前の人々がそれほど強く意識していなかった自らの主張に対する「論理的裏づけ」というものが組み込まれていたことが分かる。そして、2-3で検討したタレスの事例を思い起こしてみると、彼らがこの「論理的裏づけ」を得る過程は個々の感覚的な事例をまとめあげる帰納的な推論のあり方が示しているように、感覚的な作業ではなく理性的な作業によってなされたものであった。

資料12. プラトン「ティマイオス」51e2-6
 すなわち、それらのうちの一方（理性）は教えられるということによってわれわれの中に生まれるが、他方（正しい思惑）は説得されるということによって生まれる。また一方はいつも真なる説明を伴っているが、他方は説明を伴わないものである。また一方は説得によって動搖させられるようなことはないが、他方は説得によって左右される。また、一方は人間誰もがそれに与っているのだと言わなければならぬのに対し、理性に与るのは、ただ神々と、人間ではほんの少数者に過ぎないと言わなければならぬ。¹²⁾

これはプラトンの手による対話篇「ティマイオス」から引用した一節であるが、ここに書かれている内容が象徴的であるように、プラトン以後（もしくはソクラテス以後）、哲学は「理性」を用いた探究を重視する方向に大きくシフトすることになる。もちろん、プラトンにおける理性重視の指向性は、プラトンが探究対象としたイデア的な存在者が感覚的世界を超越した実在であったということとも密接に関係している。しかし、古代ギリシアの思想史的な流れに目を向けると、ヘシオドスが主張していた詩人と聴衆のあり方、すなわち、世界を語る際に神々によって吹きこまれた言葉をただ聴衆に伝える詩人と、それを無批判的に受け止める聴衆のありかたに比べて、プラトン的な理性重視の指向性は明らかに異彩を放っている。もちろん、強力な異彩を放っているがゆえに、プラトンの思想は優れているのだという考え方もあり立つ。しかし、ソクラテス以前の自然学に目を向けると、そこには、ホメロス・ヘシオドスの時代からプラトン的な理性重視の方向に脱却しようとする理性的営みの端緒とそれに対する信頼が見て取れる。

このように、ミレトス派がそれによって自らの言明の真実性を保証しようとした「探究における論理性」は、アリストテレスが主張するものとは異なる意味で、古代ギリシアの思想の流れをヘシオドス以前のあり方からプラトン的なあり方へと

方向転換させる契機とみなすことができよう。

[注]

- 1)『神統記』においてここに挙げたカオス、ガイア、タルタロス、エロスという四柱の神々は、他の神々とは違って、それ以前にその起源を遡ることができる神々をもたない始源的存在として提示される。
- 2)『神統記』の全体構造については、LOEB CLASSICAL LIBRARYに収録されている*Hesiod I Theogony Works and Days Testimonia* のなかで、Most が以下のように簡潔にまとめている。

- A：序文（1-115）
- B：世界の起源（116-22）
- C：カオスの子孫1（123-25）
- D：ガイアの子孫2（126-210）
- E：カオスの子孫2（211-32）
- F：ガイアの子孫2（233-69）
- G：ガイアの子孫3（270-336）
- H：ガイアの子孫4（337-452）
- I：ガイアの子孫5（453-506）
- J：ガイアの子孫6（507-616）
- K：ティタンの神々とオリュンポスの神々の闘争（617-720）
- L：タルタロス（721-819）
- M：ガイアの子孫（820-80）
- N：ガイアの子孫（881-962）
- O：ガイアの子孫9（963-1022）

このように、『神統記』においてはそのほとんどが神々の系譜の記述に費やされており、人間に關する情報は、Aの「序文」に分類される箇所で、ヘシオドスと彼に言葉を吹き込むムーサとの関係という仕方で記述される。

- 3) 本論で『神統記』を引用する際には『ヘシオドス研究序説』に収録されている廣川洋一訳を用いる。
- 4) Caldwell, R., *HESIOD'S THEOGONY Translated, with Introduction, Commentary, and Interpretative Essay*, Focus Publishing R. Pullins Company, 1987, p.30を参照。
- 5) 本論で『イリアス』を引用する際には岩波文庫に収録されている松平千秋版の邦訳を用いる。
- 6) 533d 1-534b 3を参照。なお、本論で『イオン』を引用する際には岩波版のプラトン全集に収録されている森進一訳に従う。
- 7) 534b 3-7。
- 8) 本論でアリストテレスの『魂について』からの引用文を用いる際には、京都大学学術出版会から出版されている中畠正志訳に従う。

- 9) 本論で Die Fragmente der Vorsokratiker の邦訳を引用する際には、岩波版の『ソクラテス以前哲学者断片集』に従う。
- 10) アナクシメネスの最大の功績は以下の引用文に示されているように、諸事物の差異をアルケである空気の濃度の差異に還元したことであろう。

DK13A7(ヒッポリュトス『全異端派論駁』I 7)抜粋
(空気が) 濃密になつたり希薄になつたりすると、特性が現れる。すなわち、希薄化の方向に拡散すると火になり、逆に空気が濃密になると、それが風であり、空気がフェルト状に圧縮緊密化されると、まず雲ができあがり、さらには水ができる、といっそ濃密化の過程がすすむと大地ができる、とりわけ濃密になりきったときには石ができるのである。

- 11) 「形而上学」第一巻～第三章を参照。
- 12) ここに引用した『ティマイオス』の邦訳に関しては岩波版のプラトン全集に収録されている種山恭子訳に従う。

参考文献

- Aristotle, 『形而上学(上)』, 出隆訳, 岩波文庫, 1959.
——, 『魂について』, 中畠正志訳, 京都大学学術出版会, 2001.
- Caldwell, R., *HESIOD'S THEOGONY Translated, with Introduction, Commentary, and Interpretative Essay*, Focus Publishing R. Pullins Company, 1987.
- Diels, H. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsocratiker* sixth edition, Weidmann, 1951.
——, 『ソクラテス以前哲学者断片集』第一分冊, 内山勝利他訳, 岩波書店, 1996.
- Hesiod, *HESIODI THEOGONIA OPERA ET DIES SCVTVM*, Oxford University Press, 1970.
——, *HESIOD THEOGONY WORKS AND DAYS TESTIMONIA*, Harvard University Press, 2006.
- Hirokawa, Y., 『ヘシオドス研究序説』, 未来社, 1975.
- Homer, 『イリアス(上)(下)』, 松平千秋訳, 岩波文庫, 1992.
- Plato, *Platonis Opera* vol.3, Oxford University Press, 1903.
——, *Platonis Opera* vol.4, Oxford University Press, 1902.
——, 『プラトン全集12』, 種山恭子他訳, 岩波書店, 1975.
——, 『プラトン全集10』, 北嶋美雪他訳, 岩波書店, 1975.